

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X III — 5

1986. 3

滋賀県教育委員会
財團法人滋賀県文化財保護協会
近江八幡市教育委員会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X III — 5

1986. 3

滋賀県教育委員会
財団法人滋賀県文化財保護協会
近江八幡市教育委員会

序

県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査はすでに13年目を迎え、は場整備事業の拡大に伴う発掘調査件数の増加によって種々の資料や成果が蓄積されております。

発掘調査で得られたその成果を公開し、広く埋蔵文化財に関する御理解を深めて頂く一助にしたいと、ここに昭和60年度に実施いたしました発掘調査の報告書を5分冊に分けて刊行するものであります。

最後に発掘調査にあたり、地元関係者並びに関係諸機関に対し、厚く感謝の意を表すと共に報告書の刊行に御協力頂きました方々に對しても厚くお礼申し上げます。

昭和61年3月

滋賀県教育委員会

教 育 長 南 光 雄

例　　言

1. 本報告書は、湖東地方における昭和60年度県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果である。
2. 本調査は、滋賀県耕地建設課からの委託により滋賀県教育委員会を調査主体とし、財団法人滋賀県文化財保護協会、近江八幡市教育委員会を調査機関として実施した。
3. 本書には、近江八幡市常衛遺跡(II)を取り載した。
4. 本事業の事務局は次の通りである。

滋賀県教育委員会

文化財保護課長　　市原　浩

課長補佐　　中正輝彦

埋蔵文化財係長　　林　博通

技師　　葛野泰樹

管理係主事　　山本徳樹

輔助滋賀県文化財保護協会

理事長　　南　光雄

事務局長　　江波弥太郎

総務課長　　山下　弘

主事　　松本暢弘

泉　喜子

埋蔵文化財課長　　近藤　滋

調査三係長　　大橋信弥

近江八幡市教育委員会

社会教育課技師　　岩崎直也

角上寿行

篠宮　正

5. 本書の執筆・編集は、篠宮が行なった。

6. 出土遺物や写真・図面については近江八幡市教育委員会で保管している。

目 次

序

例 言

1. はじめに	1
2. 位置と環境	1
3. 調査経過	4
4. 調査の成果	6
1 各トレーナーの概要	6
2 検出遺構	8
3 検出遺物	12
5. まとめ	19

挿 図 目 次

第1図 明治28年常衛遺跡周辺地形図	2
第2図 常衛遺跡とその周辺	3
第3図 調査区位置図	5
第4図 繩文時代の土壤実測図	7
第5図 繩文土器	12
第6図 繩文土器拓影	13
第7図 古墳時代の土器	14
第8図 S R I 出出土器	15
第9図 平安時代の土器	17
第10図 土製品他	19

図版目次

- 図版1 遺跡 1、常衛遺跡遠景（南より）
2、旧河道と調査区全景（南より）
- 図版2 遺跡 1、縄文時代土壙群（西より）
2、SK5（西より）
- 図版3 遺跡 1、SH1（東より）
2、SH2（東より）
3、SH3（東より）
- 図版4 遺跡 1、第4, 5, 6トレンチ建物群（南より）
2、第5, 6トレンチ建物群（西より）
- 図版5 遺跡 1、SB7, 9（北より）
2、SB9（南より）
- 図版6 遺跡 1、SB5（北より）
2、SB3（北より）
- 図版7 遺跡 遺構平面図

1.はじめに

常衛遺跡は、昭和58年度の近江八幡市遺跡分布調査により発見された遺跡(D149)である。遺跡の内容は、採集遺物より、飛鳥時代から平安時代までの散布地であると考えられた。

昭和59年度に、県営圃場整備事業が実施されるにあたって、事前に排水路部分の発掘調査が、財団法人滋賀県文化財保護協会によってなされ、遺構の有無と範囲を確認し、その保存策を講じることになった。調査の結果、弥生時代から奈良時代の遺物が出土し、古墳時代の堅穴住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡、溝、土壙、自然流路等の遺構を検出し、記録保存を実施した。

昭和60年度の圃場整備事業実施に先立って八日市県事務所土地改良第二課と協議した。その結果、昨年度発掘調査を実施した第1号排水路の西側にあたる切り土部分の試掘調査を行ない、その内容により再度協議することにした。昭和60年7月1日より13日まで、試掘調査を行なったところ、全面に柱穴、溝等の遺構を確認した。そこで再度協議を実施した。これにより、切り土部分の全面発掘調査を実施することになった。期間は昭和60年7月15日から9月30日までとし、遺物整理作業も含めた事業の終了は、昭和61年3月31日とした。調査は近江八幡市教育委員会が実施することになった。

2.位置と環境

常衛遺跡は、滋賀県近江八幡市西生東地先に所在する。西生来町は近江八幡市の武佐学区に所在する。武佐は近江八幡市の東端に位置し、北と東の境は安土町に接し、南の境は八日市市に接している。調査地点は、御所内町の東側に位置し、西生来町の集落の北側、東海道新幹線、国道8号線よりさらに北側に位置し、安土町に接している。

地形は纖山(観音寺山)から連なる常楽寺山(竜石)系の南側、箕作山系の西側、瓶割山の北東側の山々に囲まれた、小盆地状の様相を示す。遺跡のすぐ北側には筏川が西に向って流れ、西側には神崎郡永源寺町に源を発し、八日市を経て北行する蛇砂川が流れおり、遺跡の北西部で合流し、西の湖に注いでいる。

現在は遺跡全面が水田になっている。しかし、大日本帝國陸地測量部が明治26年測量、明治28年発行の2万分の1地形図彦根近傍26号によれば、遺跡の中央部分は広葉林及び果樹園になっており、周辺部分に水田が存在している状況である。調査地の標高は、概ね100.5mを測る。

周辺の遺跡は、先土器時代の遺跡として有舌尖頭器が単独出土した吉ヶ郷遺跡があげられる。縄文時代早期の遺跡としては、安土町弁天島遺跡があげられる。前期の遺跡として

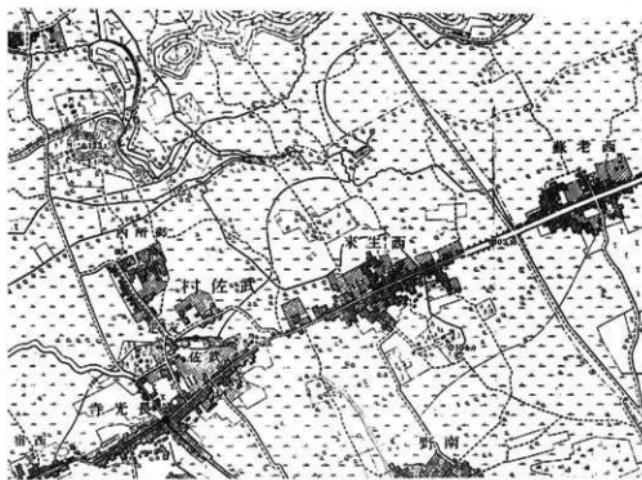
は、白王遺跡、安土町大中の湖南・獅子ヶ鼻遺跡があげられる。中期の遺跡としては、白王遺跡、八日市市内堀遺跡があげられる。後期の遺跡としては、白王遺跡と丸木舟が出土した水茎遺跡、長命寺湖底遺跡があげられる。晩期の遺跡としては、長命寺湖底遺跡、出町遺跡、勧学院遺跡、安土町大中の湖南遺跡、獅子ヶ鼻遺跡、鳥打峠遺跡、八日市市下羽田遺跡等があげられる。

弥生時代の遺跡としては、出町遺跡、高木遺跡、蛇塚遺跡、安土町大中の湖南遺跡、西才行遺跡などがあげられる。

古墳時代の遺跡としては、出町遺跡、三明遺跡、勧学院遺跡、安土町慈恩寺遺跡、小中遺跡があげられる。古墳は前期の安土瓢箪山古墳、中～後期の常楽寺山古墳群、千僧供古墳群がある。また、後期の群集墳としては、竜石山古墳群がある。

古代の遺跡としては、西中遺跡、金剛寺遺跡、觀学院遺跡等があげられる。常衛遺跡の近辺を東山道が走っていたと考えられる。中世の遺跡としては、吉ヶ藪遺跡、西中遺跡、金剛寺遺跡等があげられる。山城としては、瓶割城、觀音寺城、安土城などがある。

近世では、常衛遺跡の南側を中山道が走っていた。また、現在では国道8号線、新幹線が南側を走り、交通の要衝となっている。なお、常衛遺跡周辺は大正3年に、耕地整備が行なわれ、整然とした区画の水田ができあがっていた。



第1図 明治28年常衛遺跡周辺地形図 (1/20,000)



第2図 常衛遺跡とその周辺 (1/20,000)

3. 調査経過

今年は、前年度調査を実施した第1号排水路の西側部の切り土部分の調査を実施した。前回の調査で遺構を検出した地区に幅2m、長さ20mのトレンチを10本設定し、南から北に向って1、2、3……10トレンチと命名した。但し、第7トレンチは道路の関係から長さ7mとした。

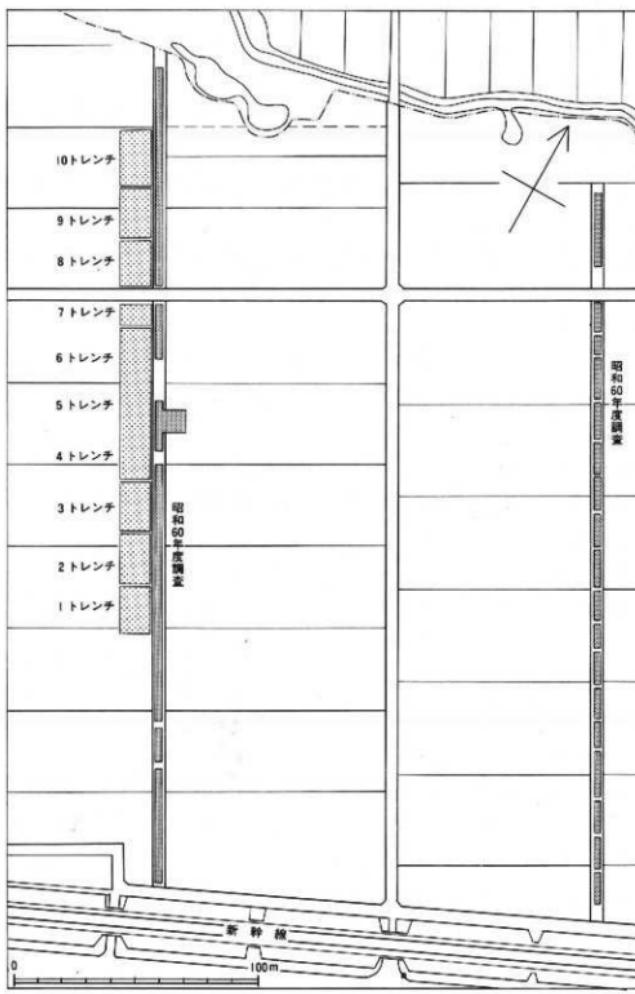
確認調査は、昭和60年7月1日から7月13日まで行ない、設定したトレンチを第1トレンチから順番に調査を実施していった。重機により表土を除去し、作業員により遺構検出を行なった。この結果、全てのトレンチにおいて柱穴、溝等の遺構を検出し、さらに平安時代を中心とする土師器、須恵器が多量に出土した。また、滋賀県では比較的数少ない縄文時代中期の土器片も採集した。

これらの調査結果を記録し、まとめ、土地改良二課との協議を行なった。この結果、設計変更是不可能であるため、圃場整備に伴う切り土部分の全面発掘を実施することになった。したがって、試掘調査のトレンチ幅を広げ、長さ20m、幅13mのトレンチを設定した。昭和60年7月15日より全面調査を実施し、第1トレンチから順次、重機により表土を除去していった。その後、引き続き作業員によって遺構検出、遺構精査を行なった。発掘作業は、第1トレンチから第4トレンチ、第5トレンチから第7トレンチ、第8トレンチから第10トレンチと大きく3単位に分けて進めていった。第4、5トレンチ検出のSRIは断面観察を行ない、遺物を採集したのみで発掘は行わなかった。

写真撮影、断面図実測、個別遺構の実測は隨時、行った。遺構の平面図実測は、第1トレンチから第6トレンチまで8月30日、第7トレンチから第10トレンチまでを9月20日に、ヘリコプターによる垂直写真の撮影を行ない、それを基に50分の1の図化を行なった。

今回の発掘調査では、縄文時代の土墳、古墳時代の住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、桶跡、溝等の多大な成果を修め、9月30日に完了した。

10月からは、写真的整理、現場図面の整理を行なう一方、出土遺物の水洗い、ネーミングを行ない、接合できる破片については、接合、復原を行なった。この内実測できる遺物については実測図を作成し、レイアウト、浄書を行なった。遺構図も同様にレイアウト、浄書を行なった。原稿を執筆し、報告書を完成させ、3月末日までに事業を終了した。



第3図 溝査区位置図

4. 調査の成果

1. 各トレンチ概要

第1トレンチ

東西に走る2本の溝と、土壌3基を検出した。検出面である基盤層は砂礫層である。

第2トレンチ

遺構検出面は基盤層の砂礫層である。検出遺構は溝2本と、土壌3基、ピットがある。

第3トレンチ

遺構検出面は、南半分では基盤層の砂礫層である。検出遺構は北半分で自然流路、南半分で井戸1基、ピットがある。

第4トレンチ

南半分は、第3トレンチの北半分で検出したのと同一の自然流路が存在する。北半分の遺構検出面は、基盤層の黄褐色土層である。検出遺構は溝2本、掘立柱建物2棟、柵1基、ピット2がある。

第5トレンチ

遺構検出面は、基盤層の黄褐色土層である。検出遺構は掘立柱建物3棟、竪穴住居2棟、ピットがある。

第6トレンチ

遺構検出面は、基盤層の黄褐色土層である。検出遺構は掘立柱建物1棟、溝1本がある。

第7トレンチ

遺構検出面は、小～中疊混じりの黒褐色土層である。検出遺構は溝1本、井戸1基、土壙4基、ピットがある。

第8トレンチ

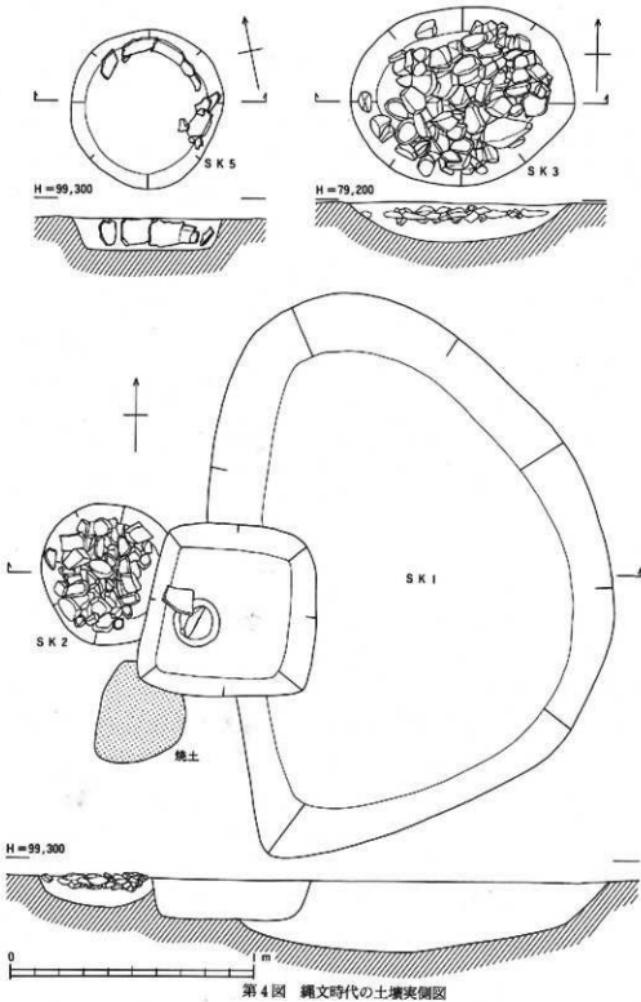
遺構検出面は、小～中疊混じりの黒褐色土層である。検出遺構は掘立柱建物1棟、柵1基、溝1本、ピットがある。

第9トレンチ

遺構検出面は、南半分では小～中疊混じりの黒褐色土層であり、北半分では基盤層の黄褐色土層である。検出遺構は掘立柱建物2棟、井戸2基、集石土壙2基、土壙2基、焼土1ヶ所がある。

第10トレンチ

遺構検出面は、基盤層の黄褐色土層である。検出遺構は竪穴住居1棟、柵1基、ピットがある。



第4図 縄文時代の土壤実測図

2. 検出遺構

常衛遺跡は、縄文時代から近代までの遺構が発見された複合遺跡である。以下各時代毎概要を述べていくことにする。

(1). 縄文時代

縄文時代の遺構としては、集石土壙、焼土がある。いずれも1ヶ所の狭い範囲に集中している。

S K 2 第9トレンチ北部に位置する集石土壙である。東側をSB 9の柱穴掘方に切られている。平面形は直径60cmの円形である。深さは15cmを測り、断面形は擂鉢状を呈する。土壙内には拳大の礫が充満していた。

S K 3 SK 2の北方に位置する集石土壙である。平面形は直径80cmの円形を呈し、深さは15cmを測る。断面形は、擂鉢状を呈する。土壙内には拳大の礫が充満していた。

S K 1 SK 2の東方に位置する土壙である。西方はSB 9の柱穴掘方に切られている。平面形は南北に長径220cm、東西に短径120cmの不整円形を呈する。深さは35cmを測り、底面は多少凹凸がある。埋土は黒褐色の单層である。遺物は縄文土器が多量に出土した。

S K 5 SK 2の西方に位置する土壙である。平面形は直径65cmの円形を呈し、深さは15cmを測り、底面は平坦である。埋土は黒褐色土の单層である。遺物は縄文土器の大破片が少量ではあるが、出土している。

焼土 SK 2の南方に位置している。北方はSB 9の柱穴掘方に切られている。焼土の範囲は南北40cm、東西35cmの不定円形に広がっている。色調は赤褐色を呈している。焼土を中心とする範囲が住居跡であることを考慮に入れ意識的に柱穴、壁溝等をさがしたが見あたらなかった。しかし、住居址の可能性は捨てきれない。

(2). 古墳時代

古墳時代の遺構としては、竪穴住居跡がある。また自然流路(S R I)は、古墳時代の土師器、須恵器が出土しているため、当時流れていた可能性がある。

S H 1 第5トレンチ中央部に位置する竪穴住居址である。上部は削平されているが、壁溝、カマド、柱穴、住居内土壙の存在を確認した。SB 3、4の柱穴掘方によって壁溝、住居内土壙が切られている。主軸はN-75°-Eを示し、平面形は六形で規模は南北5.1m、東西5 mを測る。壁溝は東壁中央部を除いて全周すると考えられるが、傾斜の関係上、西半部では確認できなかった。幅は20cm、深さは、検出面より5 cmである。カマドは壁溝の切れる東壁中央部分に位置する。削平により石、粘土等の施設は認められないが、燈色の焼土が遺存する。柱穴は4本の主柱が存在する。柱穴の掘方の平面形は直径50~60cmの円形、もしくは隅丸方形を呈する。柱痕の直径は15cmを測り、深さは30cmを測る。住居内土

壙は、東南隅に位置する。平面形は南北50cm、東西70cmの隅丸方形を呈し、深さは10cm、底面は平坦である。遺物は、須恵器壺蓋の破片が出土した。

S H 2 第6トレンチ北西部に位置する竪穴住居址である。西半分は調査区外に位置している。上部は削平されているが、壁溝、カマド、柱穴、住居内土壙が確認できた。主軸はN-77°-Eを示し、平面形は方形で規模は南北5.1m、推定東西5.2mを測る。壁溝は、調査区内では東壁中央部、北隅の一部を除いて廻っている。幅は20cm、深さは検出面より5cmである。カマドは壁溝の切れる東壁中央部に位置する。削平により、石、粘土等の施設は認められないが、燈色の焼土が遺存する。柱穴は4本の主柱が存在すると考えられ、調査区内で3本確認した。掘方の平面形は、円形を呈し、直径50~60cmを測る。柱痕の直径は15cmを測り、深さは25cmを測る。住居跡内土壙は、南東隅に位置する。平面形は南北70cm、東西90cmの隅丸方形を呈する。深さは40cmを測り、底面は平坦である。遺物は須恵器忘蓋の破片が出土した。

S H 3 第10トレンチに位置する竪穴住居跡である。上部は削平されているが、壁溝、カマド、柱穴、住居跡内土壙の存在を確認した。主軸はN-47°-Eを示し、平面形は方形で南北5.6m、東西5.0mを測る。壁溝は東壁中央部を除いて全周すると考えられるが、傾斜の関係上、西半部では確認できなかった。幅は20cm、深さは検出面より5cmである。カマドは壁溝の切れる東壁中央部に位置する。削平により、石、粘土等の施設は認められないが、燈色の焼土が遺存する。柱穴は4本の主柱が存在する。柱穴の掘形は直径50cmの円形を呈する。柱痕の直径は15cmを測り、深さは20cmを測る。住居内土壙は、東南隅に位置する。平面形は南北60cm、東西90cmの隅丸方形を呈し、深さは20cmを測る。底部は平坦である。遺物は住居跡内土壙から須恵器蓋壺が出土している。

(3) 平安時代

平安時代の遺構としては、掘立柱建物、柵溝、自然流路がある。

S R 1 第3、4トレンチに位置する自然流路である。幅は30cm、深さは1.6mを測り、緩やかな傾斜で底に向っている。埋土は黒褐色土が堆積しており、緩やかな流れが想定できる。遺物は古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・須恵器等、多量に出土している。

S R 1は、前年度調査のS R 1である。古墳時代以前から流れていたものと考えられる。

S D 1 第1トレンチに位置し、N-74°-E方向に走る溝である。直線に走り、調査区内で13m検出し、東西方向に、さらに延びる。幅は40cm、深さは20cmを測り、断面形はU字形である。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していないが、埋土の状況から考えて平安時代の溝と考えられる。S D 1は、前年度調査の第3トレンチで検出したS D 0301の西側に、直角にとりつく溝と同一であると考えられる。

S D 4 第2トレンチの北部に位置し、東西方向に緩やかに折曲して走る溝である。幅は40cm前後、深さは検出面から15cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は、平安時代の土師器・壺・須恵器・甕の小片が出土している。

S D 5 第4トレンチのS R 1の北側に位置し、N-68°-Eの方向に直線に走り、S B 01を切る溝である。長さは調査区内で5.4mを測り、さらに西側の調査区外へ延びる。幅は35cm前後、深さは検出面から20cmを測る布掘りである。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は出土していないが、埋土から平安時代のものと考えられる。

S D 6 第4、5トレンチのS D 05の北側に平行して走り、S B 01を切る溝である。長さは8.4mを測り、幅は35cm前後、深さは20cmを測る。断面形、埋土とともにS D 05と同一である。以上のことから考えて、S D 05・06は対になり機能していたものと考えられる。遺物は出土していないが、埋土の状況から考えて平安時代の可能性が高い。

S D 7 第6トレンチに位置し、N-74°-E方向に直線に走る溝である。調査区内で13m検出し、東西方向にさらに延びる。東側は前年度、第5トレンチで検出されている。幅は1.2m前後で、深さは検出面から10~15cmを測る。断面形は、浅い逆台形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は、古墳時代の須恵器、平安時代の土師器・須恵器の小片が出土している。

S D 8 第7トレンチに位置し、S D 07の北側に平行して走る溝である。長さは4.4mを測り、さらに西側に続いている。幅は40cm、深さは10cmを測り、断面図は逆台形である。埋土は黒褐色土の単層である。遺物は平安時代の土師器小片が出土している。

S D 9 第8、9トレンチの東端に位置し、緩やかに屈曲する溝である。長さは8.5mを測り、幅は35cm、深さは20cmを測る。断面形は逆台形を呈する。埋土は黒褐色土の単層である。位置・形態・埋土の状況から判断して、前年度調査のS D 0601と、トレンチ南部の東西に走る溝と同一のものと考えられる。遺物は出土していないが、埋土の状況から平安時代のものと考えられる。

S B 1 第4、5トレンチに所在し、S R 1の北側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-4°-Wを示し、南北3間(5.94m)、東西2間(4.48m)の規模をもつ。柱間は南北が1.98mの等間隔、東西が2.24mの等間隔を測る。柱穴の掘方は一辺60cm前後の方形ないし不整円形を呈し、深さは40cmを測る。柱痕は20cm前後の円形である。遺物は柱穴内より、平安時代の土師器壺・甕・須恵器壺・蓋・甕・有孔円盤等、比較的多量に出土している。

S B 2 第5トレンチのS B 1北側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-7°-Wを示し、南北3間(6.78m)、東西2間(4.86m)の規模をもつ。柱間は南北2.26mの等間

隔、東西2.43mの等間隔を測る。柱穴の掘方は一辺60cm前後の方形を呈し、深さは30cmを測る。柱痕は20cm前後の円形を呈する。遺物は柱穴内より、平安時代の土師器壺・鉢・須恵器壺・土鍤が出土している。

S B 3 第5トレンチのS B 02の北西に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-12°-Wを示す。南北2間(4.0m)、東西3間(3.81m)の総柱である。柱間は南北が2.0m、東西が1.27mの等間隔を測る。柱穴の掘方は一辺60cm前後の隅丸方形ないし不整円形を呈し、深さは30cm前後を測る。柱痕は20cm前後の円形を呈し、掘形内に拳大の石を入れるものもある。遺物は柱穴内より、平安時代の土師器壺、須恵器壺・壺が出土している。

S B 4 第5トレンチのS B 2に重複しながらS B 3の南側に位置する掘立柱建物跡である。主軸はN-4°-Wを示す。南北2間(4.64m)、東西3間(7.29m)の規模をもつ。柱間は南北が2.32m、東西が2.43mの等間隔を測る。柱穴の掘方は50cm前後の隅丸方形ないし不整円形を呈し、深さは20cm前後を測る。柱痕は18cm前後の円形を呈している。遺物は柱穴内より、平安時代の土師器壺・高壺・壺・須恵器壺・瓶・壺が出土している。

S B 5 第6トレンチに位置する掘立柱建物である。主軸はN-16°-Wを示す。南北1間(3.9m)、東西2間(3.12m)の規模をもつ。ただ、西面柱間の三等分する位置に、小型の柱穴が確認できたため、3間×2間の建物であった可能性もある。ただし、東面では確認されていない。柱間は南北3間とした場合1.3m、東西が1.56mの等間隔を測る。柱穴の掘方は60cmの隅丸方形を呈し、中間柱は25cm前後の隅丸方形を呈する。深さは10cm前後である。柱痕は18cm前後の円形を呈する。遺物は平安時代の須恵器壺が出土している。

S B 6 第4トレンチのS B 1の東側に位置する掘立柱建物跡である。一部東側の調査外に続いている。主軸はN-4°-Wを示す。前年度の調査によれば、この建物に続く柱穴は確認されていない。したがって、南北2間(4.8m)、東西2間(5.0m)の規模をもつ。柱間は、西面で南北2.4mを測り、東西は南面で2.4mの等間隔を測る。柱穴の掘方は50cm前後の円形を呈し、深さは20cm前後を測る。柱痕は18cm前後の円形を呈する。遺物は平安時代の土師器壺・須恵器壺・蓋・壺・土鍤が出土している。

S B 7 第8、9トレンチにまたがる掘立柱建物跡である。主軸はN-9°-Wを示す。南北7間以上(16.38m以上)、東西2間(4.6m)の規模を有する。北から5本目、6本目の柱には中間柱が、設けられている。柱間は南北が2.34m、東西が2.3mの等間隔を測る。柱穴の掘方は60cm前後の隅丸方形ないし円形を呈し、深さは20cmを測る。柱痕は20cm前後の円形を呈する。遺物は柱穴内より、平安時代の土師器壺・須恵器壺が出土している。

S B 9 第9トレンチのS B 7の北側に位置する掘立柱建物跡である。方向はS B 07と同一であり、しかも東面を揃えている。南北3間(7.89m)、東西2間(5.5m)の規模をも

つ。柱間は南北が2.63m、東西が2.75mの等間隔を測る。柱穴の掘方は一辺80~100cm前後、深さ30cm前後を測る。柱痕の直径は20cmの円形である。遺物は平安時代の須恵器坏が出土している。

S A 1 第8トレンチ東部に位置する柵跡である。主軸はN-20°-Wを示し、3間(6.84m)の規模をもつ。柱間は2.28mの等間隔である。柱穴の掘方は一辺60cmの隅丸方形、もしくは、不整円形を呈する。柱痕は15cm前後の円形を呈し、15~20cmの深さをもつ。遺物は出土しなかった。

S A 2 第10トレンチの北端に位置する柵跡である。主軸はN-38°-Eを示し、4間(9.2m)の規模をもつ。柱間は2.3mの等間隔である。柱穴の掘方は一辺40~80cmの隅丸方形を呈する。深さは50cm前後と一定している。遺物は縄文土器が少量と平安時代の土師器が出土している。

S A 3 第4、5トレンチに位置する柵跡である。主軸はN-16°-Wを示し、調査範囲内において3間(7.2m)の規模をもつ。柱間は2.4mの等間隔である。柱穴の掘方は一辺30~60cmの方形もしくは不整円形を呈する。柱痕の直径は15cm、深さは20cm前後である。遺物は平安時代の土師器が出土している。

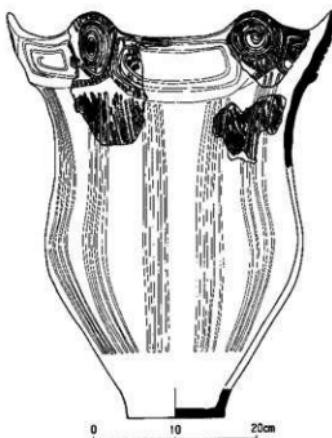
3. 検出遺物

調査区全域から、多量の平安時代の土師器、須恵器が出土している。古墳時代の土器は少量出土している。縄文時代の土器は主として遺跡北部で出土している。他に平安時代の土錘、有孔円盤、鞆の羽口等も出土している。

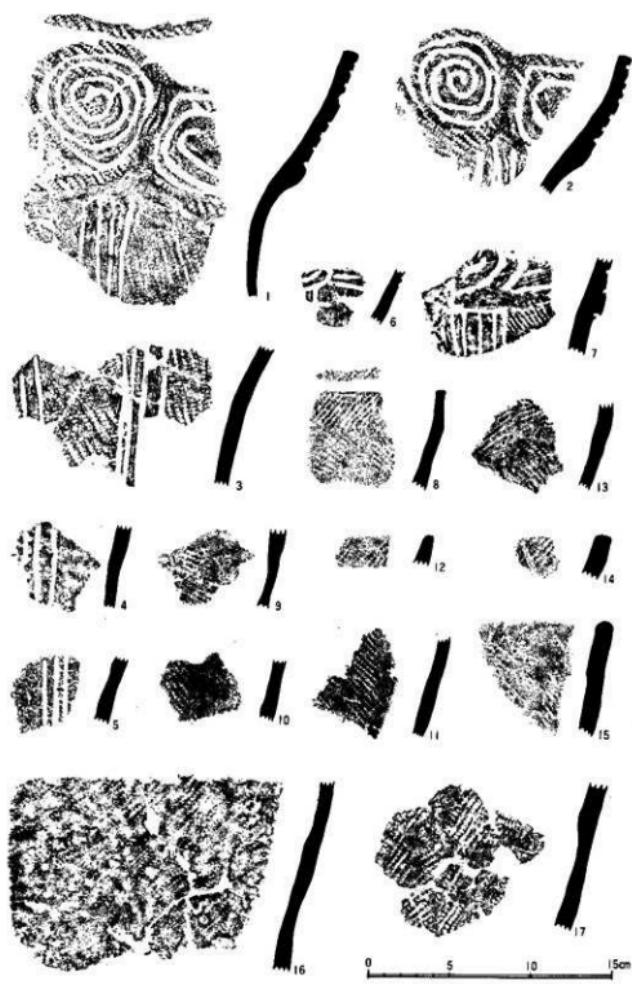
(1)縄文土器

縄文土器は主としてSK1、SK5から出土している。

SK1 大形の土壤内に不規則な状況で小破片が出土した。4、5は深鉢の洞部破片である。地文にLR縄文を施し、垂下沈線を3本引いている。縄文と垂下沈線の前後関係は不明瞭である。6は深鉢の口縁文様帶下部の破片である。地文は無文で沈線により渦巻文



第5図 縄文土器



第6図 繩文土器拓影

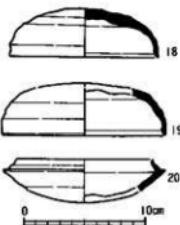
等を施している。7は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部文様帶は隆帯と沈線により時計回りの渦巻文を構成している。その後、RL繩文を施している。胴部文様は、口縁部の渦巻文の下部から6本の垂下沈線が施されている。その後、RL繩文が施されている。したがって、沈線内にも一部、繩文がみられる。8～13は同一個体と考えられる深鉢の破片である。口縁部は湾曲せずに、そのまま開く形態を呈する。口唇部にはLR繩文を施し、口縁部は幅2cmのLR繩文原体を横位に一回施し、それ以下は縦位に隙間をわずかに開けながら施している。14、15は深鉢の口縁部破片である。14はLR繩文を横位に施し、15はLR繩文を縦位に施している。17は深鉢の胴部破片である。LR繩文を縦位に施している。

S K 5 土壌内に2個体の破片が直立して出土した。1～3は同一個体で他に底部の破片も存在する。復原すると第5図になる。波状口縁を呈する深鉢で、口縁は大きく開く。文様構成は6単位と考えられる。口縁部文様帶は円形および椭円形の隆帯区画を交互に設け、区画内に時計回りの沈線で埋めている。その後、口唇部及び口縁部文様帶にRL繩文を施している。胴部文様は円形区画の下から1単位、隋円形区画の下から2単位の垂下沈線が施されている。垂下沈線は4本で、その後、縦方向にRL繩文が施されている。したがって、垂下沈線内にも繩文が残っている。底部は無文となっている。16は深鉢の胴部破片である。縦方向のRL繩文で器面を埋めている。

(2)古墳時代の土器

古墳時代の土器は、竪穴住居跡及び自然流路SR1から出土している。

S H 3 出土土器 須恵器蓋(18)が出土している。口径12cmを測り、天井部はヘラ削りを行なっている。



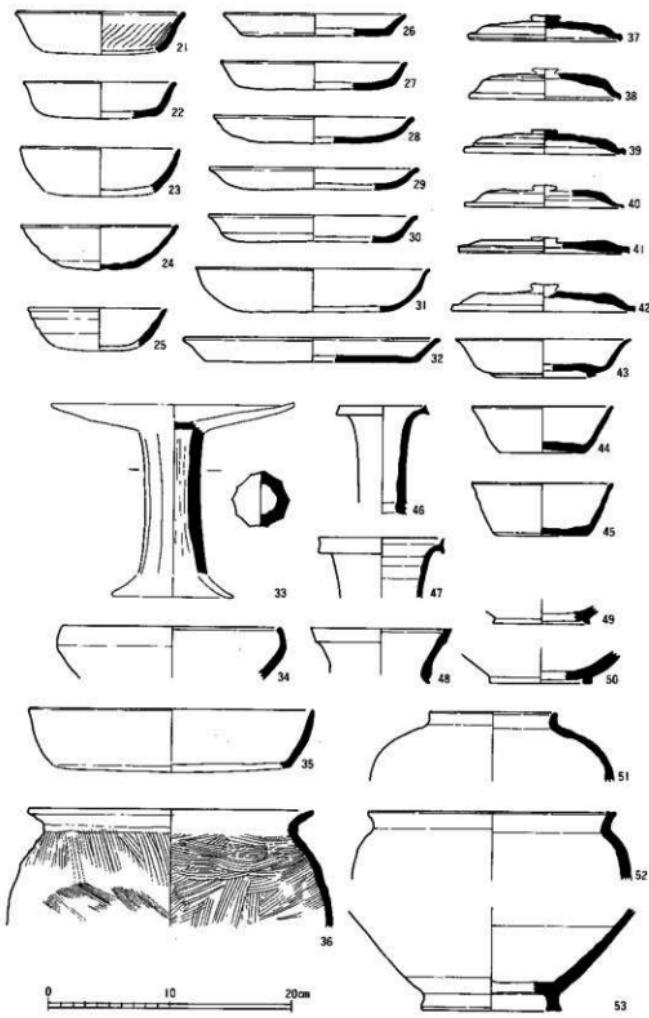
第7図 古墳時代の土器

S R 1 出土土器 須恵器壺、蓋が出土している。壺(20)は受部径13.3cmを測る破片である。蓋受けの立ちあがりは低く、内傾している。蓋(19)は口径13.3cmを測る破片である。天井部はヘラ削りを行なっている。

(3)平安時代の土器

平安時代の土器は、調査範囲内全面において須恵器、土師器が多量に出土しており、若干の灰釉陶器、綠釉陶器がある。特に、自然流路SR1からは多量に出土している。一部、奈良時代の土器も含めて説明する。

S R 1 出土土器 古墳時代から平安時代の遺物が出土している。土師器壺A、皿A、高



第8図 SR 1出土土器実側図

坏A、鉢A、壺A、須恵器坏A、坏B、蓋A、壺A、壺L、甕C、灰釉陶器坏がある。

土師器 坏A (21~24、31)。21は口径13.5cm。口縁部は外反し、内面に放射状暗文を施す。22~24は口径12.4~12.9cm。口縁部は外反するものと、そのまま立ち上がるものとがある。31は口径23.2cm 18.9cm。口縁部は強く外反している。35は口径23.2cm。口縁部まで、そのまま立ち上がっている。

皿A (26~30、32) 26~30は口径14.8~17.0cm。口縁部内面を強くナデて、つまみ出すもの (26) と、端部を丸く収め外反するもの (27~30) がある。32は口径20.5cm。端部内面を強くナデて、つまみ出している。

高坏A (33) 脚部の破片である。10角形の面取りを行なっている。

鉢A (34) いわゆる鉄鉢形で、口縁部は内彎する。口径は17.8cm。

壺A (36) 口径は23.3cm。口縁は外反し、端部を丸く収めている。胴部は、内外面ともハケメを施し、口縁部は、内外面ともヨコナデによって仕上げている。

須恵器 坏A (44、45) 口径は11.4cm。底部と体部の境は明瞭で、体部は開きながら立ち上がり、端部は丸く収めている。

●B (43) 口径は14.3cm。底部と体部の境は明瞭ではなく、口縁は大きく外反する。

蓋A (37~41) 口径は12.3~15.0cm。いずれも器高が低く、偏平な紐が付く。端部は強く屈曲している。

壺A (51) 口径は10.3cm。口縁部は短く、真っすぐ立ち上がる。体上位で肩が張っている。

壺L (46、47) 口縁部破片。口径は7.0cm、10.2cm。口縁端部は、つまみ上げている。46は自然釉が多量に付着している。

甕C (52、53) 口径は20.0cm。やや外反する短い口縁部で、端部を内側につまみ出す。

S B 1 出土土器 土師器坏A、坏B、須恵器皿A、蓋Aが柱掘方から出土した。

土師器 坏A (68、69、71、72) 口径は9.6~12.8cm。口縁部は外方に真っすぐ延び、端部は丸く収めている。

坏B (78) 口径は19.0cm。底部から口縁にかけて大きく開き底部に高台を有する。

須恵器 皿A (66) 口径は18.0cm。底部は平底で、短い口縁部は開きながら端部に至る。

蓋A (55、58) 口径は11.8cm、13.8cm。器高は低く、端部はつまみ出している。

S B 2 出土土器 土師器鉢 (80) が柱掘方から出土した。口径は22.6cm。体部から口縁にかけて折曲しながら開き、端部は丸く収める。体部外面に丁寧な斜格子の暗文を施して

いる。

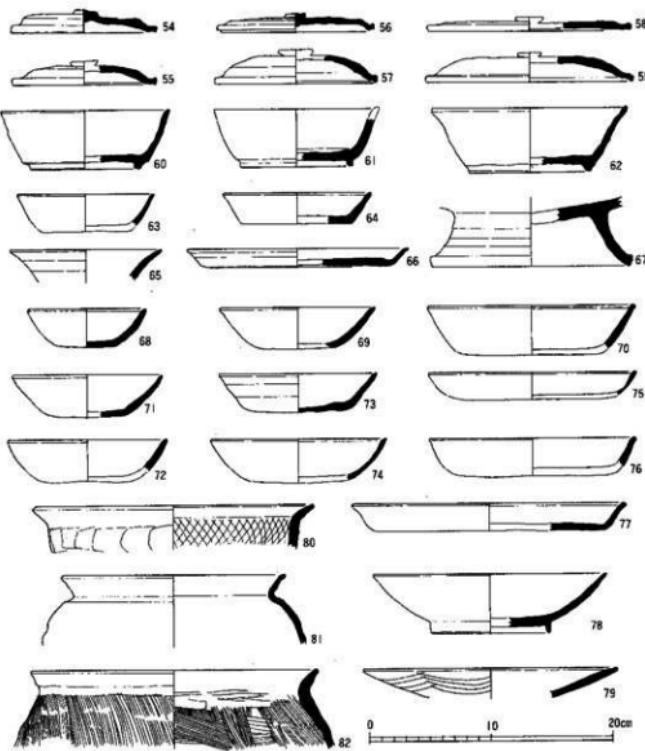
S B 4 出土土器 土師器壺A、皿A、高壺A、須恵器壺Bが柱掘方から出土した。

土師器 壺A (74) 口径は14.2cm。底部から口縁部にかけて大きく開き、端部は肥厚する。

皿A (77) 口径は22.2cm。平坦な底部から口縁部は外反し、端部内面を強くナデてつまみ出している。

高壺A (79) 口径は20.5cm。壺部の破片。壺部は中心から直線的に伸びており、外面はヘラミガキを行なう。

須恵器 壺B (85) 口縁部の破片で口径は12.5cm。口縁は大きく外反する。



第9図 平安時代の土器

S B 6 出土土器 土師器、皿A、須恵器、坏Aが柱掘形から出土している。

土師器 皿A (76) 口径は17.0cm。口縁部は外反し、端部は丸く收めている。

須恵器 坏A (63) 口径は11.2cm。口縁部は外傾し、真っすぐ伸び端部は丸く收めている。

S B 9 出土土器 土師器坏Aが柱掘方から出土した。

土師器 坏A (73) 口径は13.1cm。口縁部は外傾し、真っすぐ伸び端部は丸く收めている。ロクロによるナデを施している。

第4 トレンチ出土土器 須恵器蓋Aが出土している。

須恵器 蓋A (56) 口径は12.9cm。器高は低く偏平な鉢を付けている。端部は強くつまみ出している。

第5 トレンチ出土土器 土師器坏A、皿A、壺A、須恵器坏C、坏B、蓋Aが出土している。

土師器 坏A (70) 口径は16.7cm。口縁部は外傾し、端部は丸く收めている。

皿A (75) 口径17.2cm。口縁部は外傾し、端部は肥大する。

壺A (82) 口径は23.5cm。口縁部は外反する。胴部は内外面ともハケメを施し、口縁部は外反する。胴部は内外面ともハケメを施し、口縁部は内外面ともヨコナデを施している。

須恵器 坏C (84) 口径は12.0cm。器高は低く、口縁部は外傾し、端部は丸く收めている。

坏B (60~62) 口径は13.9~15.2cm。平らな丸底から口縁部は直線的に立ち上がり、端部は三角形を呈する。高台は底部と口縁部の境に付けている。

蓋A (55、57、58) 口径は11.8cm~16.9cm。55は器高が低く、偏平な鉢を付ける。57、58は比較的器高が高い。いずれも、端部を強くつまみ出している。

第6 トレンチ出土土器 灰釉陶器脚付盤 (67) が出土している。脚部の破片である。底径は16.2cm。内外面とも光沢のある釉を施している。

第7 トレンチ出土土器 土師器壺Aが出土している。

土師器 壺A (81) 口径は18.3cm。口縁部は強くヨコナデを行い胴部との境に稜をなしている。

(4)土製品他

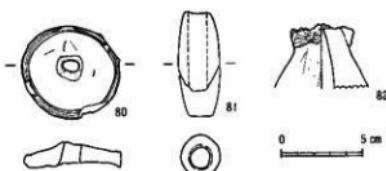
土器以外のものとしては、土錐、有孔円盤、鞆の羽口がある。

土錐 土師質の土錐がS B 2、S B の柱掘方から出土している。(81)はS B 2から出

土したもので、全長推定6.5cm、最大径2.5cmを測り、円筒形を呈する。直径は1.2cmを測る。

有孔円盤 (80) 須恵質の円盤で、S B 1の柱掘方から出土している。直径は6cm、厚さ0.9cmを測り、一方がふくらんでいる。孔は中心からずれた位置にあり、直径は1cm程度である。用途は紡錘車等考えられるが、類例がみあたらないため、不明である。

轍の羽口 (82) 轍の羽口はS B 4の柱掘方から出土している。先端部の破片である。先端は溶解し、鉱滓が付着している。現存で最大径は5.8cm、内径は1.6cmである。



第10図 土製品他

5.まとめ

常衛遺跡は調査の結果、主として縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが判明した。それだけに、隆起した問題も多い。したがって、各時代毎に問題を提起する形で、まとめとしたい。

(1)縄文時代

縄文時代の遺構 縄文時代の遺構として今回検出できたものは、土壙2、集石土壙2、焼土1がある。いずれも、5mの範囲内に近接している。SK1は不定形で大形、SK5は直立した土器を含み、SK2、3は集石で充満している。集石は焼けた痕跡が、見られない。以上のことから考えると、墓跡と想定することが可能ではないだろうか。焼土は竪穴住居の地床炉と考えたいが柱穴、壁溝等検出できなかったため、性格は不明である。

縄文土器 常衛遺跡から出土した縄文土器の編年的位置は、文様構成からみて縄文時代中期末の北白川C式2～3期に相当するものである。ただ8～13は縄文原体を口縁部は横位に、それ以下は縦位に施し、垂下沈線が存在しない点からみて星田式の特徴を有している。また、縄文原体は京都府北白川遺跡に比して、RL縄文の割合が多い。これは北白川C式の分布域の東端に位置することから、東日本の要素の強いRL縄文を多用している

と考えられる。また、器種構成は深鉢のみで浅深は出土しなかった。これは、石器が出土しなかったことと合わせて考えると、遺構の性格によるものであろうか。いずれにしても、数少ない当該期の資料が増加したことは、縄文時代中期末を研究する上で重要である。

縄文時代中期末の遺跡立地 滋賀県においては、縄文時代を通じて琵琶湖沿岸部の山際に立地する遺跡が比較的多い。しかも、現在の琵琶湖の水位の下になっているものが、ほとんどである。このような立地の中で縄文中期末の遺物が出土しているのは、湖北町葛籠尾崎湖底遺跡のみである。米原町磯山遺跡のように中期末の前後の時期が存在しながら、中期末の時期を欠くものもある。これとは逆に常衛遺跡をはじめとし、東浅井町の醍醐遺跡を代表とする琵琶湖から離れた遺跡が非常に多い時期である。これは、琵琶湖の水位の変化による影響も当然考えられるだろうが、東日本からの文化的流入によるところが、大きいのではないかと考えられる。

(2)古墳時代

古墳時代の集落 常衛遺跡の古墳時代の遺構は竪穴住居跡が今年度3軒、前年度2軒が検出されており、他に旧河道がある。竪穴住居跡の規模、構造から考えて、ほぼ同時期であると考えられる。時期は住居跡内の遺物、旧河道の遺物から考えて、6世紀後葉である。今回調査した3軒の構造は、いずれも竪の右側隅に住居跡内土壙が存在する点で、共通している。特に、SH1・2は近接しており、主軸方位も同一であることからみて、同時存在の可能性が高い。住居跡内土壙は、貯蔵穴の機能を有するものと思われる。古墳時代の集落は遺物量も少ないことから考えて、数棟単位の小規模な集落が、比較的短期間営なまっていたのであろう。

(3)平安時代

平安時代の集落構成 常衛遺跡の平安時代の遺構は掘立柱建物、柵、溝、旧河道がある。時期は遺物からみると、9世紀後半を中心とした時期である。掘立柱建物は、旧河道SR1を境として、北部に位置する。さらに、溝SD7を境に大きく2群に分けることができる。南群(SB1~6)は3間×2間の小規模な建物と、3間×3間の縦柱の倉庫を中心とした群である。北群(SB7、9)は比較的大規模な建物群である。北群は重複がないのに対し、南群は重複が著しい。これは空間利用の違いによるのであろうか。

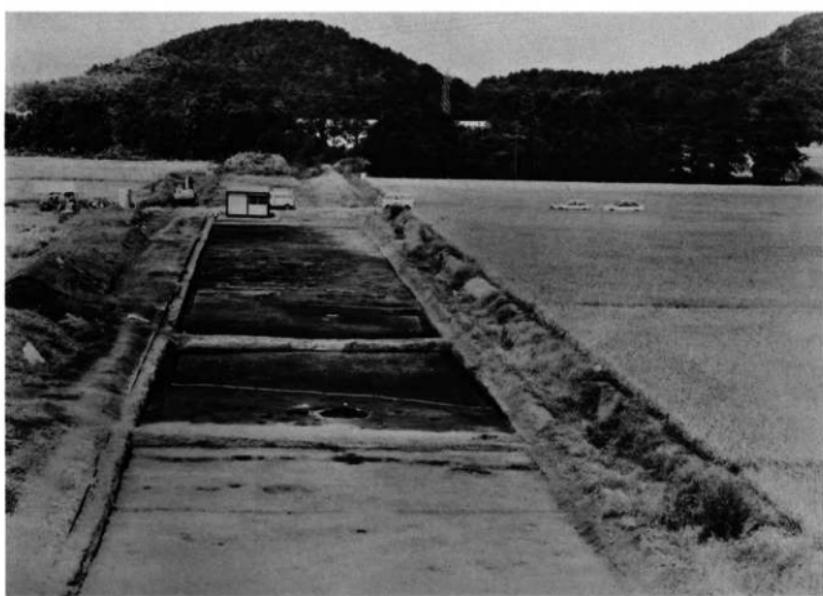
東山道と常衛遺跡 常衛遺跡は「和名類集録」によるところの、蒲生郡篠田郷の範囲内に想定できる。さらに、遺跡のすぐ南を「延喜式」によるところの野洲郡篠原駅と神崎郡清水駅を通る東山道が通っていた。常衛遺跡周辺は条里の遺構が残っておらず、東山道は蒲生郡条里の方位で、通っていたと考えられる。方位は、北から東へ35°程度、振れてい

る。常衛遺跡の掘立柱建物は、北から西へわずかに振っている程度であることから考えると、東山道と建物との方向、あるいは条里との方向は、無関係であったと考えられる。むしろ、北を意識していたものと考えられる。

図 版



1 常衛遺跡遠景（南より）



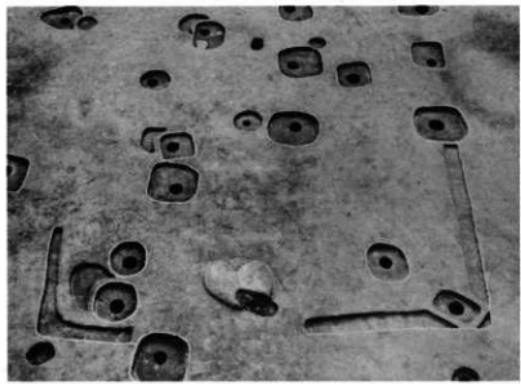
2 旧河道と調査区全景（南より）



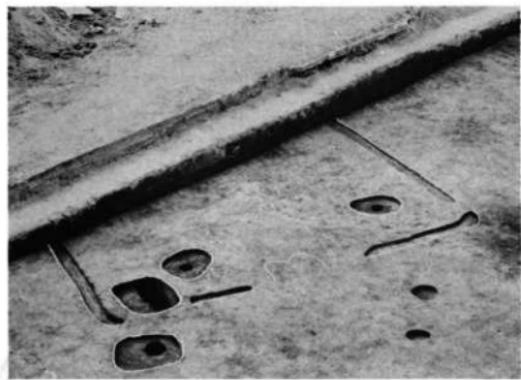
1 繩文時代土壙群（西より）



2 SK5（西より）



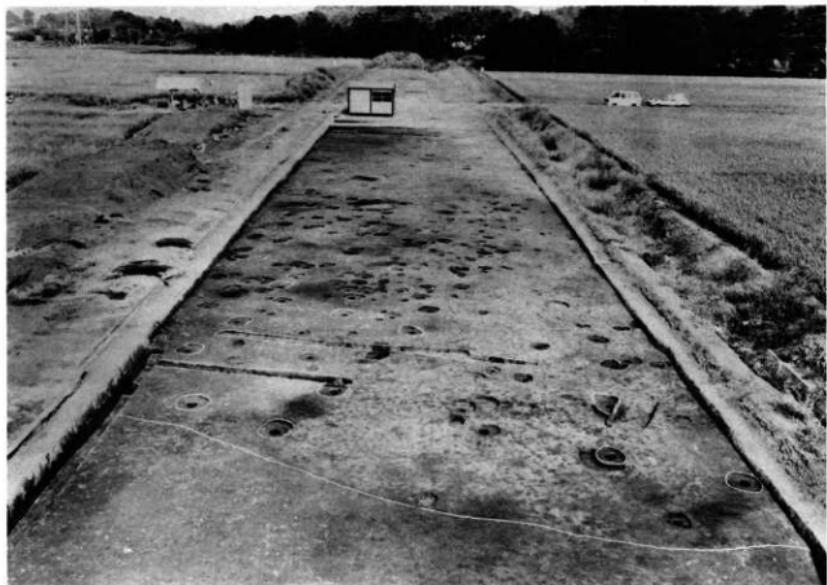
1 SH 1 (東より)



2 SH 2 (東より)



3 SH 3 (東より)



1 第4.5.6トレンチ建物群（南より）



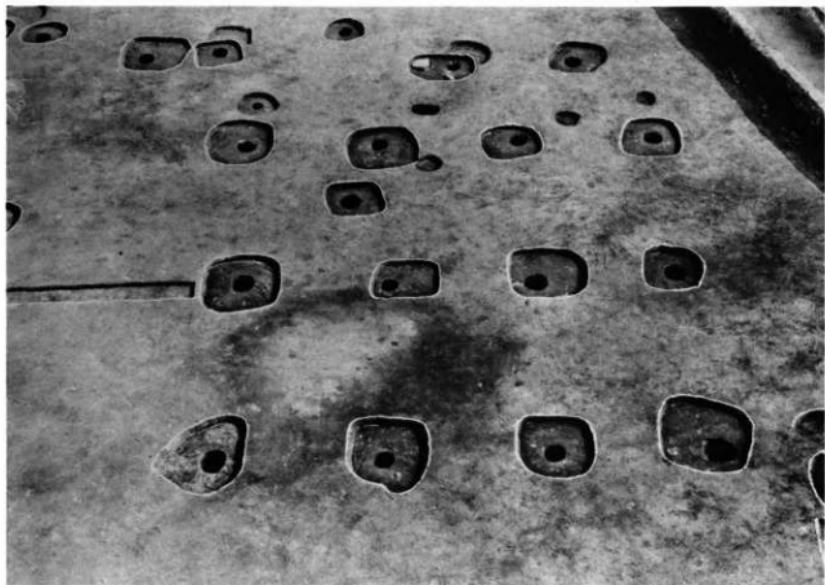
2 第5.6トレンチ建物群（西より）



1 SB7.9 (北より)



2 SB9 (南より)



1 SB5 (北より)



2 SB3 (北より)



ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 X III-5

(昭和61年3月)

編集・発行 滋賀県教育委員会文化財保護課
大津市京町四丁目1-1
電話 0775-24-1121 内線 2536
湖滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
電話 0775-48-9780
近江八幡市教育委員会社会教育課
近江八幡市桜宮町236
電話 0748-33-3111

印 刷 京都市下京区油小路仏光寺上ル
有限公司 真陽社
